関山峠から笹谷峠まで

昭和四三年三月二七日～三〇日
今出隆康（単独）

仙台山脈・・・私はこう呼ぶのだ。

仙台平野の東端、多賀城の丘に立てば西方に聳える県境背稜山脈のスカイラインがパノラマとなって展開している。年に何度か栗駒とか吾妻の一角を奇跡的に見ることがあるが、泉ヶ岳から蔵王の不忘山までの山並は四季折々の姿で私達の目を楽しませてくれる。近年県境の開発が行われて笹谷峠から南面白山までの夏径(なつみち)が開通した。またその頃、関山峠から船形本山までの県境も開通した。それ以前は蔵王全山とヤブ難路と云われた雁戸～笹谷ルート、泉～船形～定義ルートだけであって比較的低山帯の二口山脈、面白山脈は全然見放された存在だったのである。約一〇〇キロメートルに及ぶこのスカイラインを一気に縦走することが出来たならどうであろうと仙台岳人の大いなる夢である。

しかしこの巨大なスカイラインも夏径がほとんど接続し、残すところ南面白から関山峠までの二〇％となった。だからこの二〇％を突破すれば無雪期の県境仙台山脈の縦走が可能となったのである。夏径開通といっても低山帯であるだけにヤブの繁茂著しく最近の偵察行では廃道寸前と云われ、全く惜しまれることである。

昭和三九年一〇月下旬、最初の仙台山脈縦走が試みられた。四泊五日の予定でどこまで達することができるかやってみたのである。私と妻の二人に風間君が送りサポートであっ

た。最初に泉ヶ岳、そして縦走路に入る。Ｃ１は仙交小屋。好天に恵まれて関山峠へ。ここより問題の面白山脈に突入する予定であったが、天気図芳しからず、アオノ背付近のヤブ漕ぎは猛烈なダニの攻撃に遭い、悪戦奮闘。数歩歩いてはズボンやシャツに飛び付くダニを払い合って、又数歩の状況であった。ダニの大量発生、この付近ダニの汚染地帯だ。速やかな脱出が必要だったので、作並街道に急遽下山した。関山峠から五万分の一地形図には山径として書きこまれている点線が面白山付近まであり、廃道と思われるが辿ってみようと考えていたのだ。

作並まで通りがかりの車に乗せてもらい仙山線で面白山に下車した。車中で手の指に食いついたダニを発見した。面白荘に一泊。翌朝未明、カモシカ尾根の往復による北面白頂上をアタック。その後小東峠からスキー場まであると聞いた炭焼き道の発見に随分苦心したが、判らず断念して紅葉川林道を下り、所部より登りなおした。ガスは朝からだったが東の風が強まり、雨が来た。小東峠は吹き飛ばされると心配し、その手前の休場で落ち葉を掻き寄せ幕営した。

翌日は二口山脈の縦走に向う。時折ガスが切れて近景が見えたが、悪天に属した空模様。笹谷峠から雁戸にかかる頃、降りは猛烈になり、夏径は沢となって流れ、風は厳しかった。ゴーゴーとうなるマイクロウェーブの塔の下、カケスヶ峰の石堂に宿を取る。結局は刈田の頂上で断念して下山となって夢も厳しい現実に流されてしまった。

しかし成功する筈もないデカすぎる計画だったのだから仕方がない。失敗であってもそれなりの意義があったと信じている。もし関山峠から面白山脈に突入していたら途中の二泊三日で果たして面白山駅に出られたか撃退されたか、怪しいものである。

その後、昭和四〇年三月宮城県岳連の主唱する県境山脈リレー縦走が行われ、県境山脈がクローズアップされた。我々山岳会は関山峠から船形山までの約一五キロメートルをトップランナーで完走した。

前列右から３人目が筆者

昭和四二年一〇月、夏径不毛の関山峠から面白山脈に深野、今出パーティで試登。初雪寸前のヤブ山を踏破した。完全な廃道であり、厳しいヤブ漕ぎが待っていた。Ｃ１は船倉中腹にツェルトビバーク。Ｃ２は面白山峠、最終日はガス濃厚で迷い岳に達しながらも定かな尾根を辿ることができず断念。駒新道へ戻って面白山に下山した。この山行は翌春の関山峠より南面白山までの予備偵察でもあった。

昭和四三年、仙台山脈中ただ一ヶ所残された未開発の山脈である関山峠～南面白山のアタックが迫っていた。しかし不運にも今出が健康を害して年に一度のチャンスを失いかけていた。深野氏はすっかり諦めて他の山行に走った。

不運が幸運に変わることもある。計画を放棄した私であったが、三月も終わる頃、健康を回復して単独行でアタックすることになった。多少風邪気味だったし、厳しい雪山の五日間を思えば、我いとしきファイナルゲートにも懸念があった。

三月二七日より三一日までの五日間に関山峠から南面白山、更に伸ばして笹谷峠までの長い縦走を計画した。雪洞の工事時間を二時間半から三時間に見積もり、日没時間に完成するように、行動を停止する時間は午後三時頃とした。雪洞内には就寝時ツェルトを吊るし、エアマットの上にシュラフを使用、カイロ二個を使用し安眠対策を計る。雪洞入口にはビニール透明とキスリング、スコップ、ピッケルなどで外気を防いだ。装備としてはピッケル、ワッパ、全オーバー、カメラ、ラジオ、ホエブス、コッヘル、Ｗガス、固形燃料、合羽上下、サングラス。食糧関係では、赤飯を用意し、朝食は蒸して食べたのが目新しいアイデアであり、毎食楽しみにしていた。とにかく贅沢は許されないので腹八部であり、計画以上の食糧は少しでも省いた。ローソクも巨大な奴を一本しか持たないし、ピッケル、スコップのケースなども全部省いた。それで女性用大型キスリング一杯に収めることができた。深野氏には悪かったが、この処女地を一人占めする幸運に恵まれて、いやが上にも闘志を燃え上がらせていたのである。

しかし、読者諸君に深くお詫びしなければならない。それは昭和四三年一〇月二七日の会山行、ハダカゾウキ沢沢登り中に山手帖を紛失してしまい、細部にある貴重なデータを失ってしまったことだ。この為、主要地のコースタイムは記憶の中からたどらねばならないが、私としても誠に残念なことになった。それで正確は欠くけれども、大まかに理解把握して貰いたいと思っている。

三月二七日

自宅を出たのは六時四〇分。バスは始発の宮城バス。六時五〇分に乗車。山形交通バスは仙台駅前日乃出会館前七時二〇分である。しかしバスが着いたのは七時二一分であった。しかしバス停にいた紳士にきくと上ノ山行はまだこないと云う。よかった、ついている。乗車して車掌嬢に関山トンネル山形口で降ろして下さいとお願いしておく。大変良い天気で、今宵の宿はどこに掘ろうかと胸がおどる。四八号線は除雪が行き届いていて確かチェーンなしで峠を越したようだ。

八時四〇分頃、バスから降りる。もちろん誰も降りない。静かだ。積雪が一メートル位ある。ブルドーザーで寄せられたところは二メートル位の壁になっている。

ザックをデポり、取付きルートの偵察をやる。去年の秋に登った山径。急峻なのでジグザグだった。一部沢めがけて土砂崩壊地点があり捲きようがなく危ない綱渡りをやらざるを得ない。南斜面で霜柱が融けて足場のとりようがない。しかしここより登るルートもないと思われるので強行突破止むなしと覚悟して、デポに戻る。ワッパを履いて九時頃ザックを背負う。

先程のトラバース、ワッパの爪とわずかな石ころをスタンスにどうやら無事に突破した。気温がやたらに暑く感じられ、又、実際雪の腐りようも酷くなって来た。稜線へ出るまでの一時間半は何度も雪のステップが崩れて木にブラさがっていた。それでも四八号線の自

動車の音がだんだん遠くなり、春風そよぐ稜線に出た時は全くほっとしたものである。苦労多かっただけに、ここを下山することは真平ご免と云いたかった。ここで一本立てた。北に標高八〇〇の関山。この付近は低山であるが県境尾根だけに雪庇は立派で遥か遠くまで連なって見える。南望は山に隠れて見えないが、北方船形連峰は寒風の電波塔より累々と盛り上って望まれる。

いよいよ雪庇の縦走がはじまる。最初のピーク八〇四独標点を通過。雪がワッパに塊まりとなってくっつき歩きにくい。又、雪庇の崩落が目立ち縦走適期がとうに過ぎたことを教えている。その為にクレバスを避けて藪に逃げた。従って藪漕ぎの難に直面しなければならない。

第二峰八四〇ｍメハナ岳。この頂上より顕著な北西へ派出する尾根を有する。頂上の太いヒバの下で海苔まきお握りを喰う。太陽の強い光線の下で雉(きじ)打ちをしておく。天気が良すぎてついのんびりしてしまう。この前もそうだったがこの付近の地形図に誤りがあるのを再確認した。船倉の尾根と作並街道尾根の中間に明瞭な尾根が実在するのだ。この先偏平な一ピークより東方に走るそれである。方向を見定めて樹林で広くなった県境を一目散に駆け降る。

船倉山九八一メートルは東峯に六〇度位の岩壁を有し、厳しい表情であるが、中峯・西峯はゆるやかに波打つ如くブナの原始林に蔽われて穏やかなたたずまいの山である。県境は中央峯で東西を二分し、西方へ稜頂沿いに画して面白山へ繋がる。その特異な山容が一歩一歩近づいて来る。

索道の山から一気に下って船倉のコルへ出る。そこに例の営林署の索道櫓がある。巨木の伐採があったので、久しぶりに水気のないものに腰をおろして休む。いよいよ今日のヤマ場、船倉の登りがはじまるのだ。

少憩後、鞍部を突切り急な登りとなる。小一時間で頂上に着く。しかし原始林に囲まれ

冬の面白山

て展望は望めない。東船倉から西船倉まで直線で一五〇〇メートル以上あるのだから、随分長い稜頂である。その間に北面白の厳しい山容が大きくせり上って来る。少し傾いた太陽に逆光となってあるいはギラギラ斜面を輝かせ、あるいは黒々とかげり合って凄まじい迫力で聳えている。西船倉に至る間に山体が侵蝕されてヤセ尾根となっているところがあり多少緊張させられた。あとは緩やかに軽いヤブとソフトな雪庇をたどれば目的の雪洞地点面白のコルへと到着。

雪庇をその辺吟味してこれぞと云うところから穴掘りにかかる。午後三時には穴掘りにとりかからないと日没後も掘ってなければならなくなる。雪庇は三～四メートルの積雪で、どんなに掘ってもヤブは出なかった。ただ単独作業なのでチョコレートやクラッカーを頬張る間も惜しんで夢中でやらざるを得ない。

夕刻、東方より黒い雲がおしよせて来た。そして雨もパラついた。六時頃雪洞は完成しローソクに火が灯った。こうなれば降ろうが吹こうが何もこわくない。入口をとざせば白銀御殿だ。

梅酒を少しやり、夕食をとる。一〇時の天気図をとると睡眠が充分とれないので午後四時に一応とっておき、食事後に等圧線や気圧配置を記入して明日の天気を予測することにした。だから雪洞作業中も気象通報を念頭においてあと十分、あと五分と時計をみながら雪のブロックを掘り出すのだ。

三月二八日

目が醒めれば頭の上に黄色いツェルトが吊下っていて吐く息が白い。あゝ雪洞だったなと気がつく。死んだように眠っていて夢と現実がすぐに一致しないのだった。小雉に立てばもう外は明けて来ている。ただ乳白のガスの世界だ。かなり濃厚だ。朝食は赤飯を蒸して食べる。低温のため、赤飯はポロポロに変化して生米のようになりとてもそのままでは

食う気になれない。しかしコッヘルの蓋に適量をのせ水を与えて食器をかぶせホエブスで加熱すると餅米はふんわりと伸び、炊きたて同様となり実においしい。これに胡麻をふりかけてフウフウ息を吹きながら食べるのだ。桜色の飯粒とチョコレート色のササゲ豆が何となく孤独をなぐさめてくれる。

食事も済んだし番茶も呑んだ。エアマットを残してパッキングも完了。しかし濃厚なガスは僅かの視界も与えてくれぬ。やむを得ず、しばしの停滞をした。雪洞内で済ませておいた方がよい仕事もやって、香ばしい匂いの中で二時間位過ごす。

午前十時、多少ガスが明るくなったので勇躍北面白のアタックに出発。去年の偵察で自信を得ているので高みへ高みへとワッパを運ぶ。

急登約二時間、雲中の山頂に着く。面白大権現の石碑の前で休憩。石碑に自分の通過をメモした紙切れを結びつける。下りは慎重にやや西方にまくようなあんばいに鞍部へと出る。雪は大分減少して笹薮の露出している所もあるが、稜線は立派な雪庇で、しかも瘠せていて油断は許されない所が多い。尾根通し縦走するとトンネル尾根に出てしまうので、頃合をみて県境沿いと思われる線上を急斜にまかせて滑降する。勿論シリセードである。乗り継いで行くうちに峠の笹薮露出地帯へと出る。行動時間は余りない。今宵のねぐらをどこにするか。サトル平が目標であったが、今朝の停滞で無理となった。九六五ピークに突入し、いよいよ獣臭いヤブコギがはじまる。尾根は単調でなく、クランク状に曲るので視界の悪い時はこの付近取っ付きにくい所である。北面白でガスられてもここで晴れてもらったのは幸運であった。雪庇崩れで藪に追い込まれながらもカクシ岳、セツコ岳と無事に通過し、迷い岳一〇四四メートルに接近する。去年見た三日月沢などはっきり思い出す。迷いに迷った…その結果断念したなつかしい山だ。その仇の山に今はねぐらを求めて和睦を示さねばならない。

駒新道をまたいでその中腹の雄大な雪庇に一夜の宿を許してもらう。来し方に夕陽に輝

く北面白の荘厳な山容が大きく聳える。その姿刻々と色彩と陰りを微妙に変化させるのを眺めながら必死に雪を掘り出した。

午後四時、半分出来た雪洞に半身をかくし天気図をキャッチする。寒気がしのびより手は氷のように冷たくその間は少しも体の休憩にはならぬ。昨日の雪洞はT字型だったが、今日はL字型とした。Lの方が外気を遮断するのに向いているからだ。

エアマットをしいてL型の奥にあぐらをかく。ローソクがともりホエブスが歌う。湯が沸騰する。ラジオの音楽が流れる。あゝわが天国。思い馳せれば多賀城のわが家。母は、妻は、あづさは・・・そして胎内に大分成長したゆきよは・・・みんな無事だろうか。みんな心配しているだろうか。満天の星、明日の天気を約束している、とめどなく群がる星の海。山の星は一等星も五等星もその差なく等しくギラギラと恐ろしいまでに輝き合うのだ。

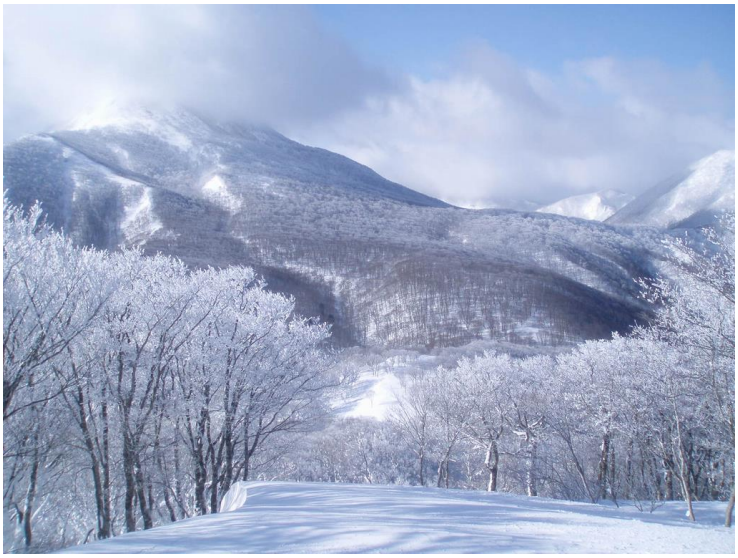
三月二九日

予定通り五時起床。好天を利して一挙に昨日の分を挽回し、且つ本日の分をも上廻ってやろうと云う意気込み。それには早発ち、雪の腐る前にかなりのアプローチを占領しなければならない。朝食もそこそこに凛々しい山の寒気に身を曝して、堅くしまった雪にワッパの爪を立てる。今日は行けそうだ。心の中から喜びがこみ上げて来る。

一〇四四メートル迷い岳、この頂上は目と鼻の先だ。すぐ右手に廻り込んで県境稜線をたどる。降りは走ること。しかし爪がガッチリ喰い込んで思うように駆けられぬ。スキーでもやりたい斜面がある。そして樹相は椎木帯から樺帯へと移行して行く。

間もなく大東岳と南面白山と迷い岳の連結点ダンゴ平ことサトル平に着く。ブナの巨木帯で、本縦走中、船倉山とこのサトル平にしか見られないものであった。

大東の特異な風貌、中東を従えた南面白の量感溢(あふ)るる銀峯に挟まれたここサトル



大東岳の北面

平は誠にユートピアとでも称したい素敵な所だ。右手の権現沢の源頭の小沢が何本かこの平につき上げており、近道狙ってもすぐかわされてしまう。見覚えのある大東北面のスロープに出ると今年の二月、風間、越後、深野、兵藤らと南面白から大東岳、更に野尻尾根をやった時の赤布標示に出合う。この尾根をたどって南面白に向う最低鞍部付近、あの時一本立てた雪庇の下の休憩点、あっこの辺だったなと思い出す。ここより見る山王岳のハダカ岩の奇観はこの季節ならではのものであろう。純白の山肌に黒々と直立する巨大な前衛峯、どんなアングルを以ってしてもこの地点より勝る展望所があろうか。

天気は快晴、ピッチ快調で霧氷に飾られた南面白の頂上に近づいて行く。何度か降ったこの急峻な尾根を今は初めて登りに使う。どんなにか苦しかろうといつも思いながら降ったこの尾根だったが、雪のほどよい締りの為にトントン拍子に登ってしまった。頂上で一本立てて出発した頃八時に近かったと思う。今までの山旅は全く夏径のない尾根であったがここからは南蔵王まで長々と夏径が続いているのだ。

風衝が激しくて着雪の少ない所ではたまに夏径が露出している所もある。中東平・・・ここには短い笹が露出して膚を刺す風に騒いでいる。中東岳・・・山形盆地を隔てて屏風のように連なる月山、朝日連峰、飯豊連峰のまばゆい白銀の峰々。思わずザックをおろしてカメラを取出してしまう。重量制限でたった一本三六枚しか撮せぬ貴重なフィルムだ。その中から五枚を裂いて毎朝九時、自分のポートレートを撮っておく。髪の伸び工合くらいの変化しかなかろうが一つの研究として試みたものだ。

中東岳から小東への降りは倭性樹林帯の藪くぐりの急斜だ。小東岳手前の小ピークで一本立てる。あっと云う間に小東峠に出る。山寺八・五キロメートル、本小屋七・九キロメートルと書かれた真新しい頑丈そうな指導標が深々と雪に埋もれて頭を出していた。少々雪は腐りかけて、日差しが少しうらめしくなって来る。いよいよ二口山脈への第一歩である。山王岳のハダカ岩を近景にした大東西面の雄姿・・・とかく大東は東面ばかり尊重せ

られがちでたしかに迫力があるが、又この西面にもかくの如き一面を秘めている事を痛感させられた一瞬であった。

山王岳への登り。雪庇はズタズタに崩壊している所が多い。天気はあくまでよく好調のままに山王岳を通過。二口山脈の雄峯糸岳にむかう。雪の深々と埋まった石橋峠、そして又登りとなり、日が高まるにつれて雪の腐れがひどくワッパはぬかり汗は浴びるがごとく風が待ち遠しい。

一〇時五〇分、糸岳に立つ。樵の木立に囲まれて、そよとの風もない程に静まり返っていた。頂上より東方にのびる磐司尾根、先日岳友畠山が二口温泉よりこの頂上間を往復したばかりである。その尾根をこんな感慨で俯瞰するせいか、あいつのラッセルが一条尾根の背をまっすぐに降っているように思えた。

この静かな頂上で樵の木立と語り合いながら大休憩をした。着ている物を脱いで枝に吊るして乾した。ワッパも靴下も脱いだ。そしてこの頂上一面に飾った。エアマットをふくらましてその上に寝ころびフランスパンやチーズを食って誰もいない孤独の世界を楽しんだ。暑いほどの日差し。断片の浮雲の蒼空、何のもの音もしない。地上の楽園、肉体の存在がスーッと消えて魂までも融けて消え失せてゆくようなまどろみが訪れる。年に何度かこんなチャンスがあるのだ。移動性高気圧のど真ん中にあるのだろう。

充分な休養の後、正午この豊かな山頂を辞した。これよりは高距三〇〇メートルを下って二口峠に至るわけだが南斜面の夏径が所々露出してワッパを泥だらけにしては雪を汚した。

笹ッ葉が現れて峠に着いた。それよりは緩やかな突起をいくつも越えて徐々に高度を上げて行く。宮城県側は急斜で切れ落ちて雪原の中に追分小屋が小さく見おろされた。行くほどに古いラッセルがあり稜線をはずして東斜面をのびて行く。少し日も傾き太陽の直射も失せて雪が締って来た。

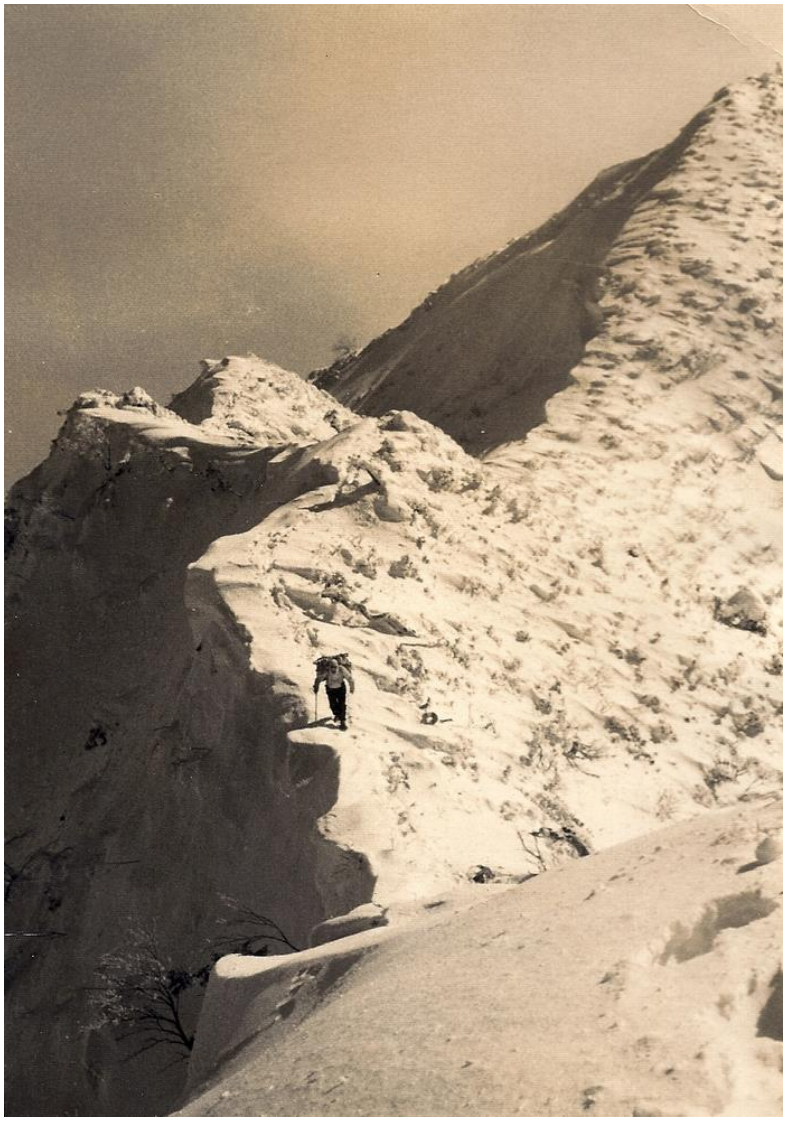
高野峠で一本。そろそろ三時を求める時刻が来る。高野峠より五〇〇メートル南の小峯に理想的な雪洞地点を発見してすぐ着工する。何と堅い雪だ。スコップがはじき返される。雪洞作業の合い間に四時の気象通報をキャッチする。雪が堅いのでキャビンは一まわり小型に出来上った。今夜は仙台の街あかりが見えようと思ったのに下界は一面の夕もやに沈んでいた。最後の赤飯を炊いて夕食を済ます。そして眠った。

三月三〇日

行動に支障を来たさないように雑用をすべてかたづけ雪洞を出た。外はガスがかかって余り良いコンディションではない。切れ間に神室の俊峯がみえたがすぐかくれた。最上神室の鞍部でちょいと迷った。地図と磁石で方向を判断して降りにかかる。地形図通りでありここは迷い易い場所である。今まで南下してきた尾根がこの小峯で切れるのだ。そして最上神室から北面にのびる尾根とやゝ平行状になって交わることがない。お互いに食い違った尾根を結ぶものは小さな平をなした鞍部なのだ。夏は何の疑問も生じない所だが冬は山の真の姿を見せてくれる。鞍部より百メートルの突き上げ、次第に高みへと導かれる。目の前にぽかっと三叉路の指導標、間もなく山形神室と標識のある頂に出た。ここからラッセルがずっと峠まであった。関沢からここを往復した人がいたのだろう。遂にフィナーレの頂上に来てしまった。雪庇が巾広く東偏して続く。ダークダックスの銀色の道を歌いつつ快よい重力に身を任せて降って行く。堰松としゃくなげ、倭性の潅木が雪消えした南面に大きく拡がり冬から夏へと移行する。ガスも消え蛤山の小峯に立つ。

この高距二〇〇メートルを降りれば山径は終って自動車道路へ出る。何か去り難い気持で四方を鳥瞰していると峠はもう除雪が完了して自動車が二、三台駐車して、人間の姿も見えた。峠には、もう春が来ていたんだ。俺の勤めは終ったんだ。これ以上やる事はない

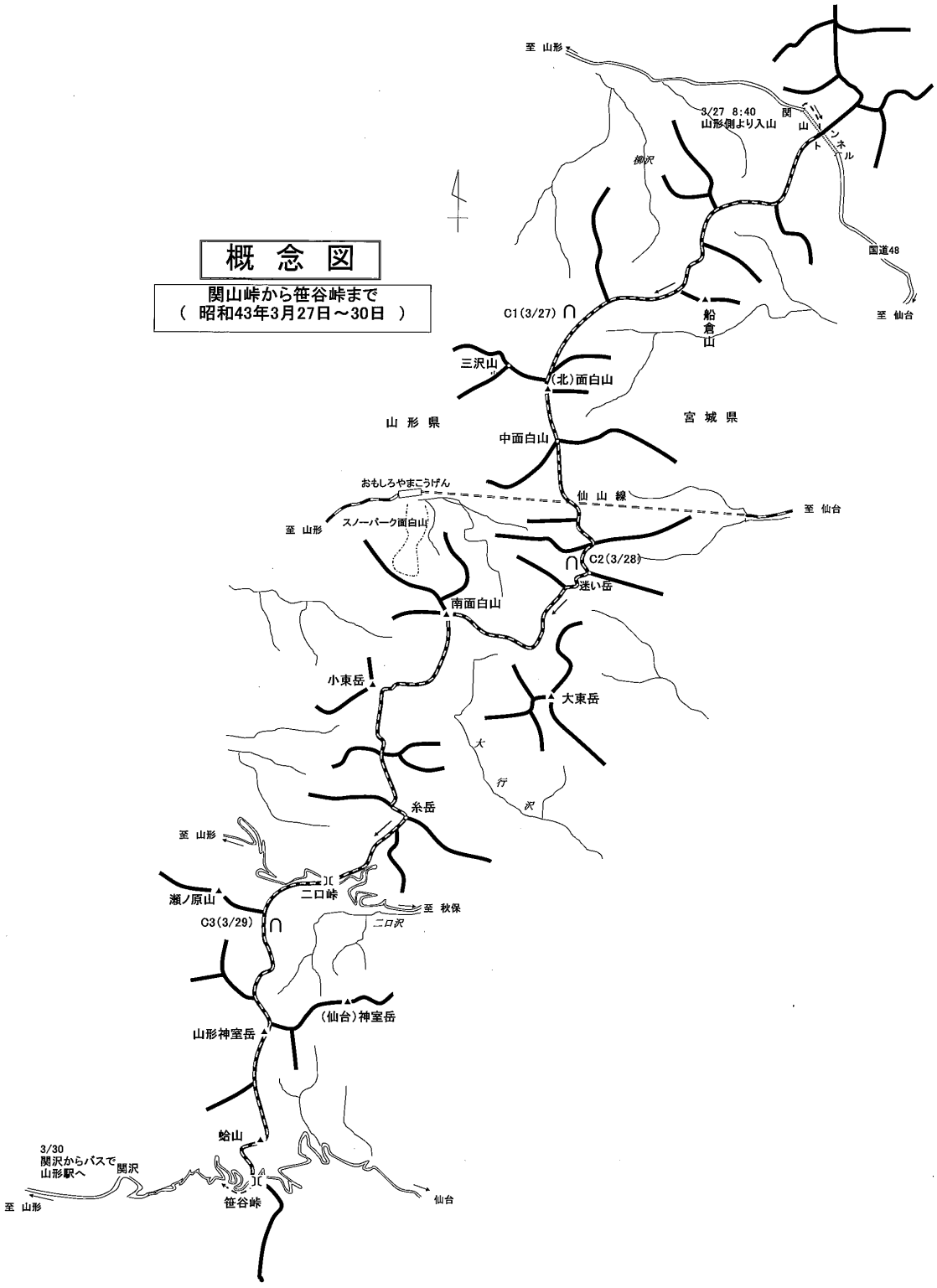
のだ。早く降れと誰かが命令する。
　蛤山の南面は着雪が多い。傾斜急なのでシリセードには好都合だ。一ちょうやるか。未練をはねのけるように一声エールを上げて勢いよくシリセードをやる。二回、三回乗り換えて土の匂いのプンプンする峠へおり立つ。指導標の倒れた板に腰をおろし、装備を解除してその辺の這松の上にひろげる。泥だらけのワッパ、オーバーシューズ、ズボン、靴下、そして昼食だ。何でも喰っちゃえ。一時間半の大休憩だ。しばらくの間そこに横になっていた。今度の山行は仙台山脈の核心部だった。これに船形連峰、蔵王連峰が加われば完成することになる。やれる。必ずやれる。その自信をますます深めた有意義な山旅だった。岳人の夢が少しずつ実現へ近づきつゝあるのだ。仙台平野からパノラマとなって連続する我々の郷土の山々を一挙に天駆ける日がやってくるのだ。何たる誇り。何たる喜び、誰も知らなくていい、自分だけの誇りでいい。そして心結び合った山の古い友達だけでいい、この喜びを分かち与えられるのは。
　パラパラと落ちかゝる雨滴に促されて私は再びキスリングを背った。少しの間藪の中を歩いてブルドーザが除雪した道路に飛び出す。宮城県側はまだ冬のまゝだが山形側はもう道路を確保している。両側は除雪の壁が高く続いて、とても近道なんぞできない。たんねんに自動車道路を、たどって里へと急ぐ。人里近く道端にふきのとうが咲き出した。一つ摘んで鼻におしあて、香り高いふきのとうの匂いを懐かしんだ。関沢の部落には卸した雪が高く積まれ童らが雪穴をつくって遊んでいた。あっオジサンもみんなと同じ雪穴を掘って毎日遊んでいたんだよと話しかけたい、そんな気持、最後の一枚そんな風景をカメラに納める。女童はテレてうまくポーズをとってくれず残念。
　バス停に来てみれば三月一杯は養鱒場までしかバスは入らぬとの事貼紙がしてあった。かくしてバス乗り遅れ。再びキスリングを背負って道を降りる。次のバスまで余り間があるので養鱒場でビールを一本、釣れたばかりの鱒でフライを注文する。米の飯も久しぶり



みたいだ。

山形圣由で帰仙すれば、街のネオンも赤く青くにじんで細かい雨が音もなく降っていた。あっ帰って来た、そんな感慨が改めて湧いて来るのをどうすることもできなかった。

（やまびと九号掲載）


概念図
関山峠から笹谷峠まで
（ 昭和43年3月27日～30日 ）
至 山形
3/27 8:40
山形側より入山
関山トンネル
柳沢
国道48
至 仙台
C1(3/27)
船倉山
三沢山
(北)面白山
山形県
宮城県
中面白山
おもしろやまこうげん
仙山線
至 仙台
至 山形
スノーパーク面白山
C2(3/28)
迷い岳
南面白山
小東岳
大東岳
大行沢
糸岳
至 山形
二口峠
瀬ノ原山
至 秋保
C3(3/29)
二口沢
(仙台)神室岳
山形神室岳
蛤山
3/30
関沢からバスで
山形駅へ
関沢
笹谷峠
仙台
至 山形

仙台山脈　蔵王隊記録

白石スキー場～不忘山～熊野岳～笹谷峠～南面白山～大東岳～二口温泉
昭和四六年　二月二七日～三月九日
L今出　隆康、寺沢　清

二月二七日　小雨無風

一五時半、畠山本部長に出発の挨拶に寄り曇天の仙台を離れる。遠藤の乗用車には、縦走隊と太田が乗車した。タイヤチェーンの装着の必要もなく遠刈田温泉経由で京成ロッヂに到着。サポートの白石在住の菅野克己君が待っていてくれた。夕刻より強風が荒れてロッヂを揺さぶり全員浅い眠りのまま起床の目覚し時計に起こされることとなった。

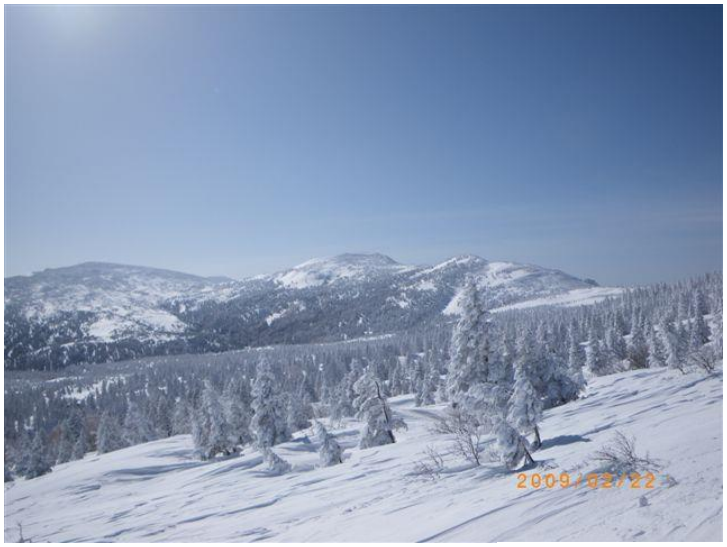
二月二八日　強風ガス快晴

三時四〇分、起床。強風は全く衰えを知らず、稜線はいかばかりか。全員朝食を済ませる。六時出発、スキー場を西進。途中より緩斜面（南端滑降コース）に入り登行を続ける。

積雪は少なくクラストしているのでワカンの必要もない。サポート隊の三名も強風と寡雪の為スキーはロッヂに残して来た。

海抜一、一五〇メートル附近の露岩地帯を通過して初めて不忘の頂上を見るのだが八合目以上は激しい濃霧が渦巻いて見ること能わず。風速三〇メートル、風に向かって黙々と歩を運ぶ。

八時、例のデポ松で軽食、尾根伝いに不忘頂上を目指す。既に霧氷圏で視界は二〇メートル以下。縦走隊は一足先に頂上を踏み岩陰でサポート隊を待ちしばしの休憩。頂上より



北屏風岳と杉ヶ峰

サポータ隊は任務完了して下山した。

九時四五分、不忘の吊尾根を屏風に向かって出発。急にラッセルが酷くなりワカンを装着する。視界一〇メートル烈風はしばしば人間を吹き飛ばした。南屏風の山頂標は捜せども確認出来ずコンパスにて進路を定めて北屏風へラッセルを続ける。左頬は凍傷気味である。樹氷の林立を肌に感じつつ北上し鞍部で行動食をとり休憩。不忘以北は雪量が豊富となり、屏風の稜線はウインドクラストしていたが這松に陥没する事も多かった。

一二時半、北屏風頂上着。標識の樹氷を叩き落して確認。芝草平への下降は特に難かしい。コンパスの照準の後、行動開始して下山をはじめる。芝草平への下降中ガスが切れはじめ夢幻の世界を見る事ができた。芝草平に着いた時はほゞ快晴となり、刈田、熊野岳まで見えていた。到着地点は夏径より南に百メートル程はずれていた。周囲は見渡す限りの樹氷原で実に雄大壮厳の極みであった。

一五時、杉ヶ峯に立つ。西風は強かったが、視界が効く事で何の苦にもならなくなった。眼下に見える刈田峠の小屋目がけて走るように降下する。一六時の天気図作成に間に合うように。

小屋の入口は積雪で半分埋まり一立方メートル程の除雪が必要だった。小屋は広すぎて寒いけれども快適であった。一九時、本部と無線交信を行う。感度は良好で滞りなく交信を終了した。

三月一日　風雪後晴

朝は風雪となっており視界は二〇メートルであった。

ワカンの故障で出発が遅れ九時となった。風速二〇メートル、視界二〇メートルの中を北に向かってコンパス頼りにラッセル。刈田避難小屋には一〇時半に到着し小屋内で休息する。三〇分休んで馬の背縦断を決行する。視界は僅かに一〇メートル、一本一本と標識

ポールを発見しながらの縦走である。
馬の背はびっしりとアイスバーンに被われて岩屑一つ見られない。熊野の避難小屋に出たが雪で埋まり使用不能。進路を定めて名号に向かう。途中何本かのポールを確認しつつ自然園上部に来た時ガスが切れ霧氷圏脱出を知る。
船形隊と蔵王隊の直接交信タイム（アタック交信）の一二：二五無線で会話を交す。船形隊は順調に進行中であった。
自然園からラッセルがひどくなりブレーキとなったが雁戸の尖峰も光り輝き心も軽く前進を続けられた。
名号峰は強風と寒気の為に滞在を許されずそのまま尾根を辿って北上に移る。
約一時間を要して最低鞍部に着く。
雪庇上の歩行が殆ど全部を占めることと強風でクラストが進んでいたことの条件で夏径ペースでいけた。ここに雪洞第一号を作る事に決定し早速手頃な雪庇にスコップを入れる。
理想的な雪洞の条件を備えた地点であったが堅雪なのには難渋した。スコップでは歯が立たずピッケルのブレードで作業を進めた。深くなっても同じで完成に三時間も費やした。
一九時定時交信も順調に行われた。蔵王隊は明日笹谷峠でサポート隊の支援を受ける事を確認。我々は良好な体調を保ちつつ雪洞に仙台山脈の第三夜を迎えることができた。

三月二日　快晴　強風
八時の定時交信にて各サポート隊が予定通り出発せる旨の情報確認。
八時五五分、出発、快晴なれども強風は荒れて緊張を許す暇もない。緩い登りの後、八方平に着く。風は一段と強まり目前の南雁戸の頂きは盛んに雪煙を巻きあげて勇ましい。迷行性地形も晴れていれば唯の杞憂でしかあり得ない。

北蔵王の稜線

休憩の後すぐ登りに取付こうと歩きだしたとたん風道とも云うべき強風帯にぶつかり二人共吹飛ばされた。地形性の風道がここに存在していた。再三突破を試みどうやら這いつくばって渡ったが僅か十メートル程の横断に非常に疲れた。南雁戸南面は嘘のように無風となり快適に登る事ができた。

一一時、頂上に着く。雪煙を上げる頂上はさすがに厳しい。北望の山々展開して遠く船形、泉まで仙台山脈の山々は続く。慎重に吊尾根を渡り急激なコルへの下降を開始する。雪礫を伴って吹上げは降ろした足が押し戻される感じで呼吸も詰まる。コルの寸前で一本立てて行動再開後パートナーがスリップし、鳥戸沢側へ滑落したが停止が効いて助かった。コルから再び急斜の登りとなり一二時二〇分、北雁戸に登頂、石碑を背にツエルトをかぶる。

雁戸を辞して降りる時、カケスが峯にサポート隊の人影を発見した。新山分岐の小さなコルを渡り二〇〇メートル先でサポート隊の兵藤、渡辺（み）、高橋、八島、の四名と出合う。感激の握手を交わし一隊となって笹谷峠小屋に下山する。ここでサポート隊心尽しの豪華な晩餐会を開催する。充分な栄養補給で後半のスタミナを蓄えましょうと言う訳だ。天気図通り夜はおぼろ月にカサがかかり天気の崩れる前兆をしめしている。

三月三日　風雪　後　濃霧

四時起床であったが悪天候で出発が危ぶまれる状態であった。東風が強く雨とも霰ともつかぬ雪が吹き付けていた。視界では二〇メートルはあろうか。薄暮のような暗さの中、七時五〇分に出発。この視界ではパーティを分散する事は危険なので、定時交信も宮城県側小屋で一緒にかたまって行ったがうまく通ぜず徒らに時間が経過しアンテナに霧氷をつけるだけであった。

交信を断念して蛤山の急斜に取付く。完全にアイスバーンとなりワッパの爪だけで登る。

復路の為赤布標識を連発するサポート隊・・頂上付近で一本立てるが仰向けにひっくり返った六人の顔に雪つぶては容赦ない。

北上を続けて一〇時、トンガリ山頂上着。これ以上のサポートは危険であり充分任務も果したのでエールを交わして別れる。雪庇に乗りじりじりと登りつめて最上神室に登り頂上を確認。一一時五分であった。視界が極度に悪くその先の行動は非常に苦労した。何度かザックをデポして偵察を繰り返した。又ラッセルがひどくなり新雪は四〇センチ位にたっした。風は全くなくなった。第一の難関県境分岐を突破し第二の難関猿鼻の下り地点に差しかかった。ここで二年前の竹竿標識を発見しその三本が示す方向に我々は導かれて行った。ワタリ岳より変針し北上に移ったが同地点より一時間四〇分行動しその間に清水峠の標識に出合うことなくコンパスの指針が以外な方向を指しているので迷ったと判断ラッセルをたどって引き返す。当面の目的は清水峠の標識の確認とし注意深くそれと覚しき地形を偵察するが発見できず。今年は寡雪の年なので全部埋没したとは考えられなかった。雪は湿雪で霏々と降り早急な休養が必要となりノゾキ附近に雪洞と決定し作業を開始する。雁戸の雪庇とは違い楽に作業は進んだ。二時間で完成し全装備を入れて落ち着く。

一九時交信にて船形隊が大東頂上到着を確認、雪洞の入口は積雪で既に閉されていた。

三月四日　風雪

起床六時。雪洞は暗い、雪洞の入口は一メートルの雪壁で封鎖された為だ。その除雪に一時間以上費やした。外は非常に悪天で視界も十メートルそこそこであり腰までのラッセルの為に停滞を覚悟し八時の定時交信で大東隊及び本部に報告する。昨日の折返し点などを中心にガスの中の行動色々推定し何種類かの方程式をつくろうと努力する。現在ガソリン、食糧、など三日分は保有している。就寝前に再び入り口除雪作業を行う。

三月五日　風雪

朝、入り口の除雪作業を行い天候を探るが依然行動不可能な状態にあった。即ち停滞である。一七時、遥か二口沢に雲が切れて追分小屋の平らしきものを発見、更に二口自動車道路らしきものが見え現在地点は清水岳頂上付近と推定できた。清水岳雪洞に第三夜目を迎えた蔵王隊は明日の天気に祈るような気持ちで就寝した。

三月六日　風雪

六時五分、偵察に出発。雪庇は巨大に膨張して今や雪洞をすっぽり呑み込む寸前であった。五〇分前進したが視界はゼロとなり引返す。八時の交信で本部は南面白頂上に食糧、燃料を緊急サポートするとの情報が入る。

八時五〇分、覚悟を決めてザックを背負う。もはや清水峠の標識にこだわる時ではない。慎重に地図コンパスで尾根を手探りするように進んで行く。一時的にやゝ視界を得て二口峠へ急曲する県境にルートを乗せることができた。吹き溜まりは腿までのラッセル、尾根上の密藪を避けての捲きなどもあり二口峠までとても長く感じた。

一一時三五分、二口峠着。標識は雪面上に僅かに出ていた。高距三〇〇メートル、糸岳頂上には一三時に立った。上りのラッセルに較べ下りは氷化が著しく困難であった。一四時、山王岳頂上。三日間の停滞で切歯扼腕していたこの足が猛烈なファイトで歩いていた。しかし三〇メートルから五〇メートルあった視界が急速に悪化して風雪が激しくなって来た。その為山王の降りで進行は挫折されてしまった。出来うるかぎりの努力でルートの切り開きを試みたが服装は濡れ疲労をつのらせるので一五時雪洞作業に着手した。食糧・燃料も些か欠乏して来た。入山以来二〇枚以上の天気図が出来たが荒天のまま恢復の兆しはない。

雁戸山の稜線　背後は神室岳から大東岳

三月七日　風雪

四：〇〇起床。七：三〇出発。天気は依然として重々しい雪空で視界は二〇メートル位である。昨夜の相談通り北東尾根をたどり樋の沢・小東峠の中間点まで下り、同地点より小東峠に登りなおす作戦を実行する。尾根は一時ヤセ尾根となったが八時現在再び広くなりブナの巨木地帯を縫って行くうち沢の出合いに着く。ラッセル腿から腰まで達する。ここで進路を変えて西進すると見慣れた断崖露岩など現れて自信を深めた。

八：五五、県境稜線が雪庇となって立ちはだかる。雪庇を突破すれば小東峠の標識を発見する。稜線上は強風が荒れて何度も飛ばされかける。小東の肩から中東の降りでパートナーのエスロンパイプ製ワッパが損傷した。中東の登りはアイスバーンでワッパの爪も充分効かず難渋した。頂稜の南端で一〇時の交信の為休憩したが入電はなかった。一一時中東頂上通過。しかしこの下りも単純に行動する事は許されず髯と睫毛を凍らせながら足元だけの視界を手探りの状態で進路をたどる。コルへ着いても南面白のとりつきで再び白い魔法にかかり立往生する。雪庇にとりついてからは順調に高度を稼ぎ頂上直下で兵藤、太田、遠藤の緊急サポート隊と出合う。

一二時一〇分より四〇分頂上に滞在し食糧及び燃料等の補給を受け前進したが風雪は進路を許さず行動一時間にして引返させられる結果となった。頂上にねばるサポート隊と交信し前進を断念し引返す旨を告げる。本部長より指令があり本日は風間号テントで休養し明日に期するようにとのこと、腰までラッセルで頂上に達すれば天幕はほゞ完成となり有難い一夜を迎えることになった。

一五時二五分、サポート隊下山。無事に帰還するように祈り又、その苦労に感謝する。

三月八日　風雪

起床四時、天候未だ恢復せず。しかし八時意を決して天幕を放棄する。昨日の迷い尾根

を確認しつつ主尾根らしき方向を辿る。しかしやゝ南の枝尾根に入ってしまう。磁針は南進に近い方向を示している。このラッセルで登り直す困難さから左手にトラバースする行動に決める。風雪はやや衰えの兆しで少し明るくなった感じがする。トラバースは成功して主尾根に乗り、ヤセ尾根、雪庇、ブナ巨木帯と進み強風荒れるサトル平に到着した。休憩したいが地吹雪から逃れる所はどこにもなかった。それでも地吹雪に翻弄されながら熱い紅茶を飲んだ。

ラッセルは高度と共に軽くなりそれに反比例して烈風が激しくなって来た。頂上にあと二百メートル地点で蔵王隊最後の交信を行う。風間、宇野両名が這いつくばって出迎えてくれた。あと天幕へ百メートル。この間、鹿打沢に吹落されぬために匍匐でじりじりと進んだ。必死の思いで頂上に登ればそこにサポート隊の大天幕があった。大東の頂上は連日の寒冷と強風で何もかも凍り磨かれていた。数年来夢見て来た最後の情景として感慨に耽ける余裕もなくザックをおろしテントに入った。凍ったワッパは容易に解けなかった。

三月八日一一時五五分、この時を忘れまい。サポート隊の差出すコーヒーを飲みながら云い知れぬ喜びが湧いて来た。かくて仙台山脈完成の夜は天幕の中のドラムを伴奏に賑毀を極めた。仙台の本部でもさぞ安心した事であろう。

寝静まった天幕の中で私独り本山行最後の夜の気象通報を書く。未曾有の冬台風は松輪島へ去ったが華北の高気圧との間に六四ミリの気圧差を残し峠は越しても依然強い冬型配置である。六日間荒れに荒れた計り知れぬエネルギーは恐ろしい。

三月九日

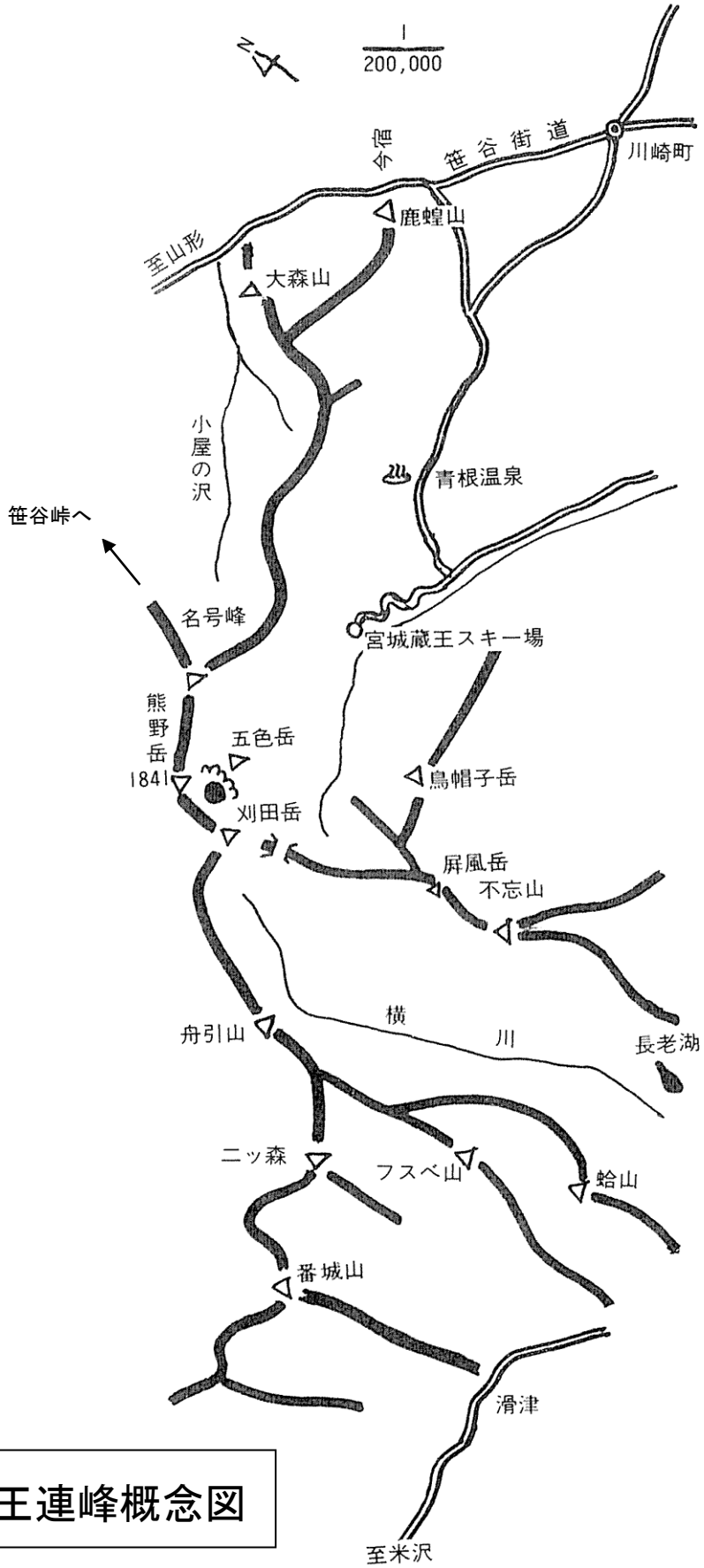
四時起床。やはり強風と地吹雪が続いていた。雪を掘りバリバリに凍った天幕を畳む。寒風は肌を刺した。キジ打ちにもザイルで確保しなければと真剣に考えなければならない激しい世界はなおもそこにあった。

カマ天（カマボコ型大天幕）

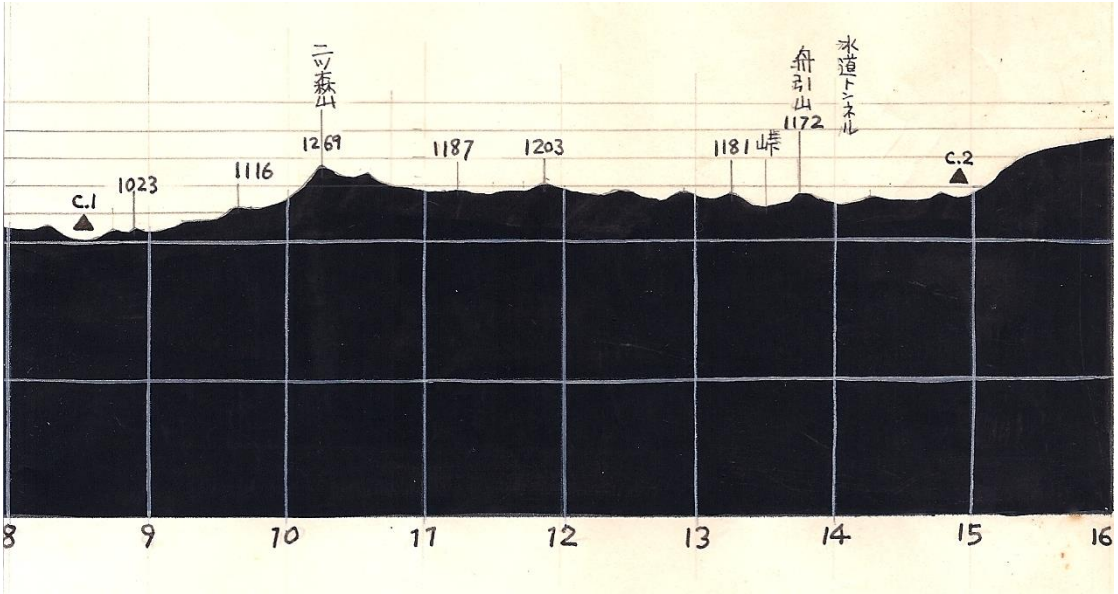
九時二五分、男子四名、女子三名整然と下山開始、下る程視界は開け、太陽の恩恵さえも与えられ別世界を思わせる。

一三時、二口温泉に到着。夕刻、全員ＹＭＣＡ会館に集合、ささやかな祝賀会を催し本部の人々と十一日ぶりの対面をして喜びを分け合った。

（やまびと十三号掲載）


N
1
200,000
笹谷街道
川崎町
鹿蝗山
至山形
大森山
小屋の沢
青根温泉
笹谷峠へ
名号峰
宮城蔵王スキー場
熊野岳
1841
五色岳
鳥帽子岳
刈田岳
屏風岳
不忘山
横川
舟引山
長老湖
二ッ森
フスベ山
蛤山
番城山
滑津
至米沢

蔵王連峰概念図



番城山から中央蔵王～鹿蝗山縦走

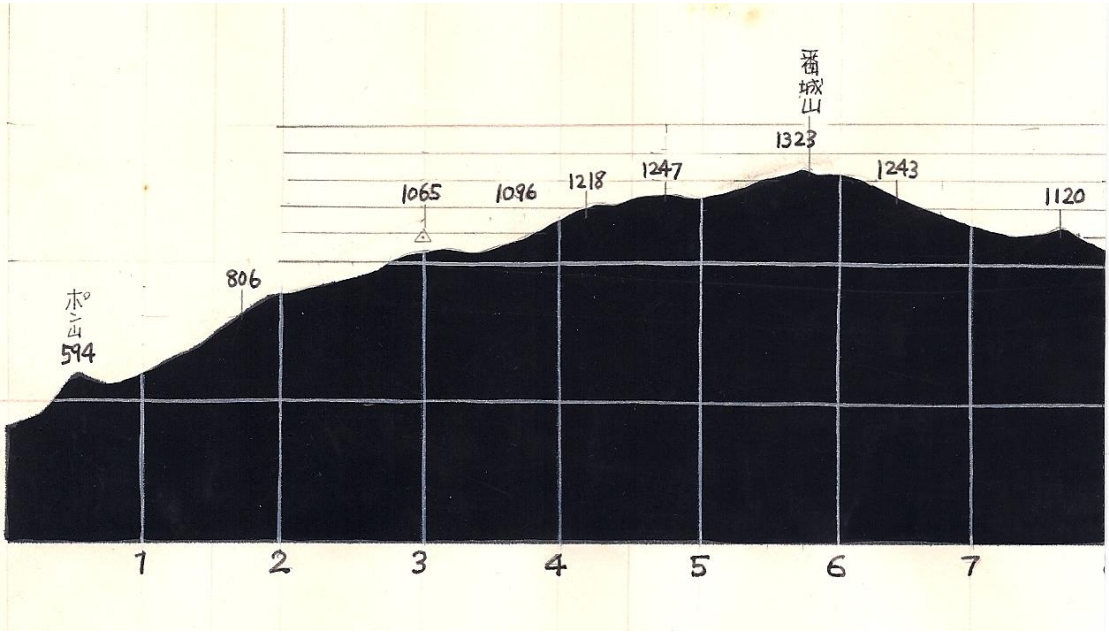
昭和四九年二月二四日～二七日
今出隆康（単独）

目的一、裏蔵王の調査・縦走
二、満四〇才の体力試練
三、自然食生活有効性の実証

目的一に於ける蔵王最高点通過後の下山路については数通りのルートが考えられるが今冬の三十年振りとも言われる記録的多雪を利して登山の対象に選ばれることのない低山帯を経由して今宿の鹿蝗山を最後の頂上とする異色の計画を立てた。目的二及び三は互に重複する点もあるが満四〇才の誕生日を控え自分の体力に自信を深めたいこと（謂わばそれだけ歳をとったことなのかも知れないが）及び二年間続けて来た自然食による食生活の立証、及び自然食による長期献立の体験をしたかったのであった。自然食プランは、殆んど菜食主義で僅かに鶏肉が植物性ペミカンに含有するだけで酪農製品・一般市販食品は全く使用していない。

昭和四九年二月二四日

三:三〇に時計が鳴った。起きて雨戸を開けると星空が天に拡がる。キスリングに食糧箱を詰めようとするが大きすぎて入らぬ。一廻り小さいダンボールに詰め替えてやっと納まる。妻はおじやを丼に一杯おいしく煮てくれた。そのうちに自助車が迎えに来た。神崎と宇野と一緒に番茶を飲んで軽く休憩してから装備の積込を行う。六日

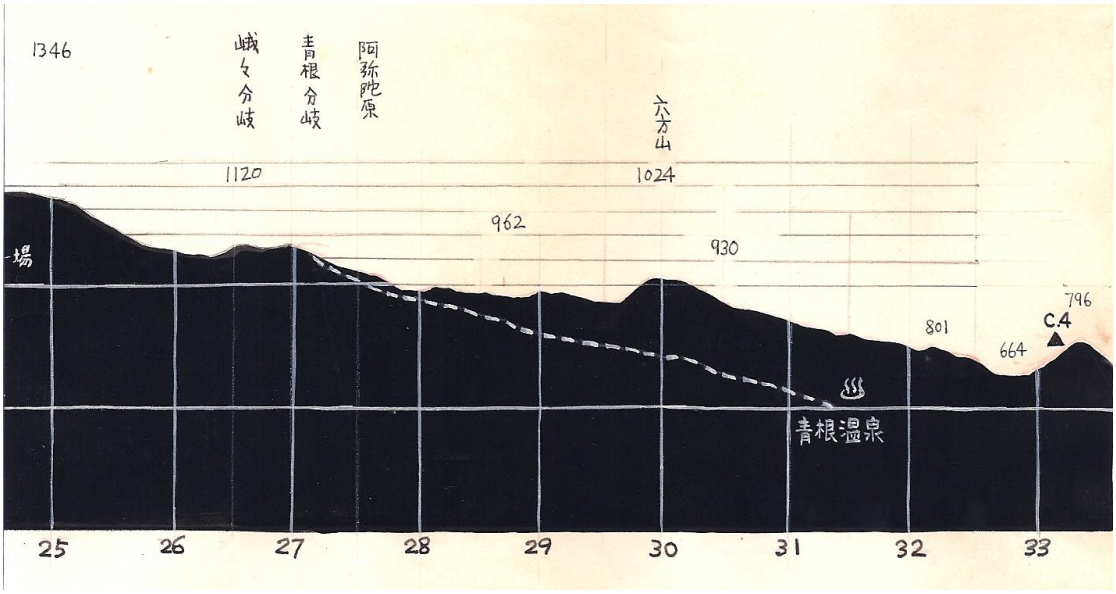


分の食糧は約一〇キロ、キスリングに詰めて総量は二六キロとなった。シュラフ、ジュラフカバー、ポンチョ、合羽ズボン、ツエルト、折畳マット、雪洞扉、ホエブス、WGタンク、テルモス、白金カイロ、ベンジン、コッヘル、角スコ、ワッパ、ピッケルの最低必需品だけで堅め、服装カメラ等は全部切捨てた。

四:三〇母と妻に見送られ車は快調に寝静まっている仙台市街を走って行く。睡眠不足なので車内で少しでも眠ろうとするが眠れるものではない。四号線バイパスを南下し白石から右折し一時間五〇分にして二井宿は境沢に到着、路上に積雪は殆んどなかったが道路両側は一メートル以上の雪壁となっている。雪壁で駐車できないので一五〇メートル程バックして手頃な場所に車を押し込む。約三〇分、朝食やら服装やらに時間をかけ、ようやく明け初めた外気に身を曝す。雪は堅く凍り小気味よい。勿論ワッパなしのスパッツスタイル。風は寒いしお空はくもる。

六:五〇キスリングを背負ってポン山を目指す。民家の前庭を通って西斜面にと廻り込む。キックステップで松の植林帯を登る。時たま雪層薄く陥没するが順調に高度一六〇メートルを稼ぐ。ポン山(五九四メートル)頂上に七:二二到達。こんな小山でも雪庇が発達し堂々たるものである。頂上にあった大石は雪の下で所在もわからぬ。一〇分間の休憩とし各自分散して山の静寂を楽しむ。一旦ポン山を下降すれば北へ真一文字の急斜が続く。いよいよ本尾根の登りにかかる。雪は堅く、キックステップが効かぬところはピッケルのブレードのお世話になる。西側斜面は伐採地帯で白一色の銀盤であり滑ったらどこまで落ちるかわからぬ。キスリングはポン山以後サポート隊が担いでくれて楽になった。サブサックなんて座布団一枚背負っているようなものだ。八〇〇メートル付近までは防火線状があり比較的登り易い。以後はブナの疎林から潅木帯に入る。積雪は樹林帯に入るとさすがにラッセルがはじまった。

壁の下で一本立てる。七:四二となり、ザックの交替をする。ふりかえると峠田岳



が朝日を浴びてくっきりと輝く。兎が飛び出した。それ山が見えた。山鳥が飛び立ったと言っては素頓狂な声ばかり出していなくちゃならないのが山男なのである。早速カメラを出して標高千突とは思われぬ魏然たる独立峯向けて両名シャッターを切る。その彼方には吾妻も飯豊もピンクがかったベールのむこうに見えるではないか。私も何やら絵心を誘われてスケッチしてみる。今回は重量制限でカメラは御法度……カメラを持つと天気に恵まれぬ確率が高いもので……五分間露出の気長な二眼カメラにとどめた次第である。

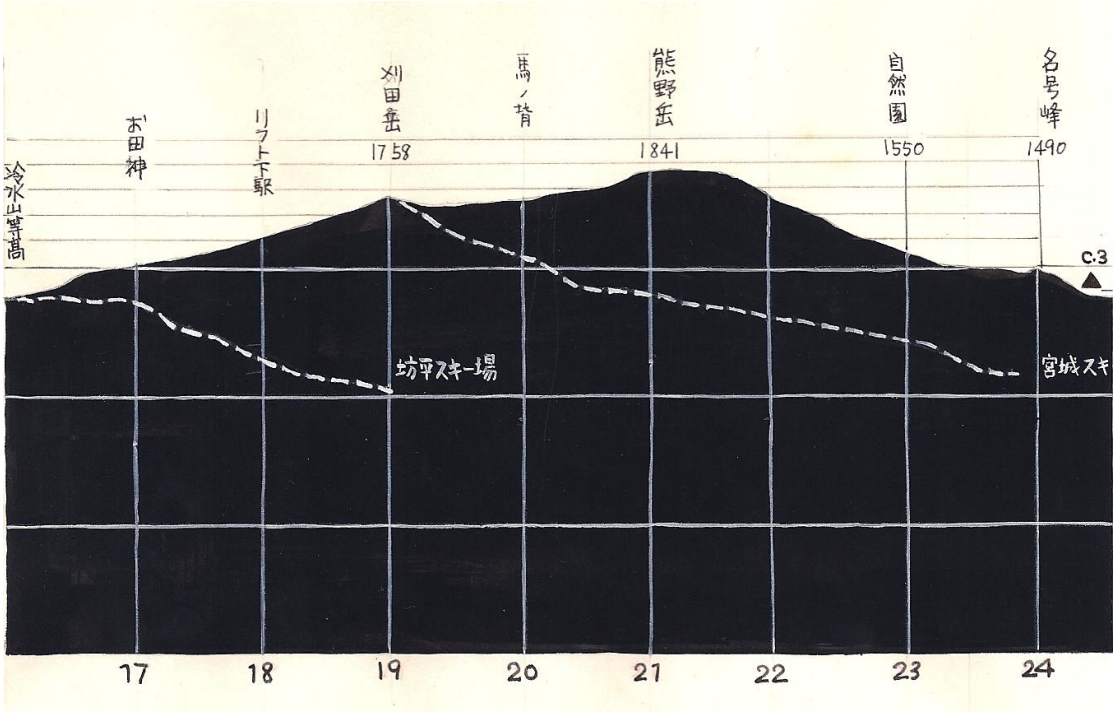
八：一二壁の上に出て一本立てる。ザックの滑落に用心しつつ中休止。これよりブナ平に入る。一〇六五P三角点付近からは見透しも悪く地形も複雑となってくる。変な所に雪庇が出来ていて目を欺き尾根の上に沢源頭の凹地が横断して神経が錯乱される。

九：三〇　日は照っているが休めば汗が凍る。一〇九六地点に達しツェルトに三人はもぐり込む。三〇分の大休憩となり各自お握りを頬張る。

一〇：三〇　一二一八P付近を通過中。顕著な峯と異なりいつの間にか通過しそして降りを感じてからああ今高みを踏んだなと確認するのである。この先は痩尾根となり東面に雪庇が良く発達して快適である。一〇：四五更に一二四七Pを通過する。巨木帯は通過し灌木帯となり両側の視界は広くなり遮るものもなく蔵王連峯が展ける。山裾はフスベ山が隠し標高一六〇〇メートル以上は雲に蔽われていて中腹のみがよく見える。痩尾根通過後は尾根が再び広くなり頂上へと続く最後の白いきざはしとなった。

番城山（一三二三メートル）頂上に着く。一一：一七なり。

天気晴、風弱まる。矮小な疎林には見事な霧氷が咲き揃い四囲の展望は素晴らしい。祠の屋根の一角が僅かに露出してその所在を示している。サポートの両君は責任を果



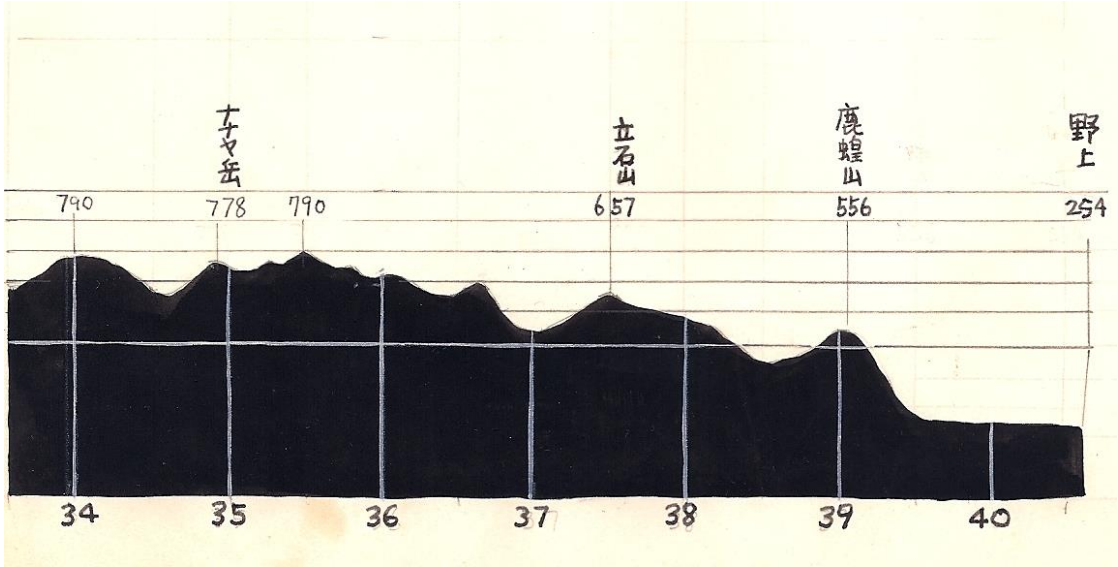
して至極満足気でありツェルトを吊って大いに気を緩めて休む。約一時間、仲間と喋り合い食物を交換し合い写真を撮り合ったりした。そしてここよりワカンを装着し下山の準備をした。

一二：一〇　裏蔵王の最高点たる番城山を辞する。三名揃って七分間、先程の踏跡通り南東へと降り頃合よしと両君と別れの挨拶をして東へ派生する尾根へと急降する。もはやこの先遥るか蔵王を越えて鹿蝗山への四〇キロメートルはたった一人の山旅なのだ。煩雑な俗界を離脱し人間一匹、自らを死地に陥れ、そこから活路を求めて生還しなければならない。たったの五日間とはいえ天涯の孤児となる晴々とした気持とまた、冬山の厳しい掟の懲罰に対する畏れを同時に感じながらも必ず完遂できるのだという自信を反芻している自分に気がつく。母も妻子も仕事も年令も社会ももはや脳裡から払拭し自分はいつの間にか凛々しい若者にそして翼をもった少年になっている。

尾根は広くすぐに樅の樹海となった。この尾根は東から北東へ、更に北へと湾曲するが広尾根のため、運転を誤ると次々に迷い尾根に引込まれる惧れがある。樹林のためこれまた視界は得難く、新雪の如きラッセルに遭遇するのであった。しかし降りなのでラッセル車にでもなった気持で雪を蹴立てて降りて行く。

時々立停っては前後左右に気を配りまた、地図コンパスを照合してはルートの確認に努める。要は左手の沢地形を失なわないことが肝心なのだ。県境が沢を渡って当該の尾根に乗り上げる付近の平伏に出れば左手の沢と高度は略々同高度となり、ここにして思えば番城頂上から県境を辿って降りても視界が効けばさほど困難な沢の渡渉でもなかったことを知った。

一一二〇Pを北に降りて行くと尾根状はなくなり前下方に湖でもあるが如き凹陥地が現れて対岸の雪庇が大きく発達している。地図を頼って大きく左手を迂回して大



深沢の源頭地帯を捲く。この付近は風衝が激しいとみえて僅かの灌木と丈の低いツツジ、笹の類があるのみで見透しは極めて良い。小山は平状となって水量観測点らしい貧しい設備や自然保護の標語柱らしい角棒が立っていたりする。夏場は案外ハイキング場か公園にでもなっているのかも知れない。

番城山頂上から丁度一時間が経過していた。高度差は三〇〇メートルとなり番城の根張りのある山体が重々しく聳えて逆光に縁どられている。

数分後に峠に降り立つ。峠は一〇〇〇メートルを僅か割っており、ここに雪洞No.1を予定しセンワリ峠と仮称していた所である。しかしまだ一三：一五、あと二時間は行動できる。そしてこの素晴らしい雪稜の誘いはどうであろう。番城山からはさほどの迫力も感じられなかったが峠からのニツ森山の双耳の峰は登高欲を煽らずにおかぬ魅力に溢れていた。肩に食込むキスリングのせいばかりでなく両山を心ゆくまで眺めたくもあり雪原状の尾根に一木立てる。一三：三〇なり、天気は素晴らしくやや軟化した雪原は穏やかで緒戦を祝福しているかの如くであった。

一四：三一　ニツ森山（一一六九メートル）の頂上に着く。

樹木は少なく、東、西、南と三方の脚下がすっきりしているのがよろしくいかにも頂上の雰囲気に溢れている。ラッセルは次第に多くなってワッパの抵抗を増して来る。十分余の滞在の後、北峯に向う。北峯まで僅か一二分を要したのみ。そのまま勢いに乗り県境を駆け下る。数分にして小峯を通過しようやく接近しつつあるフスベの大尾根に思わず喜びがこみ上げてくる。今宵の宿はフスベと県境の合致する所、三ツ俣に決めよう。

しかし、その三〇〇メートル程手前に格好の雪庇があった。雪量、安全度、地形への睨みなど申し分がないので早速ザックをおろす。一五：二六であった。急いで試掘にかかり次いで一六時の天気図をキャッチする。安眠こそ明日への活力であり雪洞に

手を抜いてはならぬ。充分な洞内空間が必要なのだ。素晴らしかった第一日目は寒々とした暮色に包まれて洞内に火が灯った。全財産は雪洞扉で外界と断たれここだけは光と熱の宇宙カプセルとなった。朝鮮人参酒で陶然となりつつペミカンおじやをつくった。茶もあれば白菜漬もある。独りで歌も歌ってみる。食事終って天気図を詳細に検討するが本土南岸に低気圧が数珠つなぎに北東に移動し大陸には一〇六〇ミリの大高気圧が頑張っているのでとても好天など覚束ない。オーバーシューズに靴を包みそれを枕に就寝する。ホェブスの音が止むといつの間にかフスベの尾根から原始林の吠哮が迫って来るのだった。

三月二五日

三:三〇腕時計が鳴って目が覚める。雪洞扉の隙間から小雪が吹き込んで、こんもりと積っている。やっぱり荒天がはじまってるようすだ。食事プランに従って炊事を行う。麺と玄米餅の朝食である。小麦胚芽も食べる。天気が悪いので夜明けは遅い。七:三〇全装備を背負って出発となった。暗い空から絶え間なく雪が降っていた。風弱く新雪は一〇センチ位積っている。今日は蔵王越えを行うことになるが余り吹かないことを祈りつつ三ツ俣の一二三〇Pに登りはじめる。このピークを踏切台にして一・二の三の掛け声で馬の背を飛び越そう。これは朝から縁起のよい標高点ではないか。

出発二〇分後、県境を降るうち地図にある黒線の林道らしいものが認められたので薮こぎの省力のつもりで辿ったが西斜面の捲き道となっており路形は積雪で薙ぎ落ち締り雪の上に新雪が二〇センチ程つもり可なり難渋なルートとなって来た。一山捲いてコルへ出たところで、やれやれと県境に乗上げて今度は忠実に尾根通しを辿る。既に風雪の世界であるが有難いことに若干の視界が得られて心強い。一一八一Pで丁

度一時間歩いたと知る。ラッセルは二五センチに達した。記録をメモるけれども雪がくっついてインクがにじむ。どこまで今日は行けるだろうか。体調は頗る良好でありこのラッセルでもペースを崩さずに進めそうである。八：四五小峯を降れば風衝の酷しい舟引のコルに到着した。樹木は少なく妙なところに巨きい雪堤が発達していてシュカブラの中に県境の標識などが見られる。夏ならば車の往来もある峠なのだろうが何とも荒涼とした景色である。

九：一〇舟引山頂上を通過、この山は一一九二メートル、丁度泉ケ岳と同高である。広い尾根を北上して行くうち突然尾根上を沢が横断し進路を阻んだ。まるで魔法だ。驚いて地図を出せばこれは如何に蔵王七不思議の一つ、沢の尾根越えに到着したのであった。予てよりこの不思議は会の話題であったが二万五千地図には隊道として表現されているので知らぬ間に通過するものと予想していたのに水路はV字谷にカットされ露呈しているとは驚きであった。勿論多量の積雪のため、水が流れているか凍結しているかは定かでない。左手に若干偵察したが良策が浮ばぬまま右手を辿ればさながら山岳道路でもあるが如く導水路が橅の山体を横一文次に一枚石沢からナンバ沢にかけて幽かに見られる。黒い橅山に白い線だ。これは思うに水の安定的確保のために山形県が水源豊かな宮城県のナンバ沢から導水しているものと思われる。それにしても一一三〇メートルの深山帯にこれだけの大工事はその着想の面白さに加えて率直に感歎した次第であった。導水路を恐る恐る渡り平状の橅の原始林にわけ入る。

やや捲き気味に樹海を横切り小ピークにて一五分間、ラッセルに疲れた足を休ませる。霰状の雪はパラつき森は暗く東から無気味な風が吹き続ける。

ガスの間に冷水山の旧火口壁の白いカールが見える。岩記号の所だけ真黒な岩場が露出して地下水の湧出口を示しているようであった。そして愈々中央蔵王圏に接近し最大の念願たる蔵王越えが何時間か後に迫ったという一つの感慨に捕われてゆくの

冬の御釜と熊野岳

だった。一〇時、行動再開、既に樅樹帯を脱出し林相は雪の壁に疎らに群生する松の木のみとなった。

冷水山等高地点上部まで一時間を要し高度差約二五〇メートルを稼いだ。林相は更にダケカンバとなり露岩と共に霧氷に彩られ亜樹氷帯となる。陰欝な樅の森林帯とは全く別世界で陽性を感ずる。東風アラレ雪は相変らずなれど視界やや優れどうやら一〇〇メートル位は見透せるのがうれしい。ここで二〇分間、ツエルト内で行肋食を食べながら休憩。自家製のパンに摺胡摩と植物性マーガリン、蜂蜜のペーストをつけて食べるのだが実に美味い。二〇年間愛用のテルモスの番茶がまた貴重な活力素となる。

更に三五分間の登行でエコーラインと思われる地形を通過する。完全な樹氷圏となり乳白の世界に次々と趣好を凝らせて登場しては幻想の世界へと耽けさせられる。一二：三〇御田神付近を通過する。緩い沢状のような斜面を次第に東方へと変針しつつラッセルを継続して行くと久しぶりに人工構造物が目に飛び込んで来る。リフトの小屋である。勿論人の気配もなく鋼索が風に唸っているばかりである。シュカブラ地帯となり雪面がカットされて雪庇やら雪溝やらで大へん歩きづらい。リフトの下を辿って行けば駐車場らしい平や馬の背に通ずる歩道などが半ば露出して主稜へと誘導してくれる。右に折れて少し行くと、馬鹿でかいモンスターに呑み込まれた蔵王レストハウスが現れた。ザックを放棄して小屋を半周し避難のための一室を見渡す。小さい薄暗い小屋は煤けて貧しかったが板の間は有り難い。乾いた板の上に腰かけ休憩しながら登山者名簿を展いて見たり記帳したりする。二〇分休憩の後一三：四五刈田岳を辞して馬の背を熊野岳に向う。馬の背はさすがに風が痛い。ポールを頼りに北上しながら時々覗くお釜湖はついぞ現れることがなかった。熊野の避難小屋までは大へん長かった。一生懸命歩いていたのに約一時間を要している。そして今山行の最高点熊野岳避難小屋に到着した。既に一四：四〇である。避難小屋は新しく、小さいながら立

派なものであった。予定では冷水山の登り口付近に雪洞Ｎｏ・２だったのでこの荒天によくぞここまで御導きありしものと感謝した。しかし明日も荒天が続くと思われるので何とか高度を下げて雪洞を掘りたい。今日の頑張り次第で縦走の成否が決まると考え名号峯まで前進することにした。小屋から出ると眩しくて瞬間何も見えないように感じた。視界は悪く何度も地図とコンパスの照合を行ないながら手探りするようにゆっくりと北東を目指して行く。

自然園まではオロシ金のようなシュカブラ地帯である。高度三〇〇メートルを降下すればさすがのガスも切れ間がでてきてあたりが明るくなり八方沢や名号方面が見えたりする。自然園の導標の前で一息入れて、また油断大敵と歩き出す。這松地帯なのと風衝のために雪浅く時々陥没してはワッパをとられる。シュカブラ帯を脱出しタンネの森を辿って行けば嬉しや名号峯が近々と見えて来た。

一六：一五 名号の雪浅き露岩の峰に立つ。さて雪洞の準備であるが周辺を駆け巡っても山勢が大らかで適当な雪庇は見出し難く、さればとて雁戸尾根にミチクサする気にもなれない。東方斜面に五分間降り吹溜りを竪穴式に掘り更に底部より横穴にしようと試掘を開始。二〇分、雪は軟く作業は捗ったが、一メートル程掘った時這松の幹が出て来て残念乍ら放棄しそこから南へ十数メートルやや雪庇状の吹溜まりに引っ越して雪洞工事のやり直しを初める。最初は竪穴式に一・五メートル掘下げその底部から横穴にと進む。うまい具合に雪は切れ易く作業は急ピッチで渉る。ただ投棄するブロックを一個一個投上げなければならず落差の利用ができないのと貯れば雪面に登って投棄の再処理をすることが厄介なことである。しかし案ずるより作業は早く片付き一七：五五には完成した。一時間一〇分の好記録である。まあ多少の難はあるが人間一人充分足を伸して安全に眠れるだけの空間は確保できた。もう洞内外は真暗だった。ローソクに火が灯る。蔵王にカマクラの火が燃えている。今日の長い山旅を反

蔵王五色岳東面

芻しつつまた、例の些やかな独酌を傾けつつ陶然と一首浮べてみる。「雪洞の仕上る際に小松出で高き香りの洞に満ちたり」いかにも垢ぬけしない歌だがどうもそれ以上発展しないのでやめた。床仕上の時に出たからよかったものの最初のうちに出たらまた引越しで一晩中穴掘りをやっていたかも知れない。洞に満ちたりとはここまで来られた満足と今宵の宿に恵まれた満足を掛けたつもりだが高き香りの洞に満つるは毎朝の慣いでもあり独り苦笑するのも我が教養のなせる技か。雪洞Ｎｏ・３予定地にＮｏ・２を設営したので一日予猶日ができたことになる。夕食後仮眠して二二時の気象通報に起き天気図をひく。冬型は強まっているので明日は吹かれるぞと覚悟した。

三月二六日

一晩中吹いてたとみえてツェルトの上に吹込んだ粉雪が積もっていた。朝食、パッキング全オーバー、ワッパ装着と型通りの準備を終え洞外へ出ようとしたが出口は雪で塞がってスタートから伏敵に攻められた。猛烈な風雪を衝いて七：一〇出発。難関とは覚悟していたが名号の降りは予想以上の苦戦となった。第一関門は名号直下高差一〇〇メートルの下りである。視界は二〇～三〇メートルしか効かない。その上、昨夜来の積雪は膝から腰に達するラッセルで無気味な感じを受ける。円錐台地を下って一ケ所繁る尾根を辿れば再び多様な巨木の樹林台地となる。その台地から一ケ所繁る痩尾根をさぐり当てねばならぬ。しかし行動五〇分にして第一の失策に気付いた。これぞと目指した尾根は次第に南へと下りはじめたのだ。前方は濁川の幽谷が見えはしないが凄まじい迫力で感じられる。残念乍ら今来たラッセルを戻らねばならぬ。そしてそのラッセルの深いことに驚ろく。古いツアーナンバー五六、五四を発見した。一三四六メートル付近を徘徊しつつ僅かのガス切れに期待して目を凝らし続けるが睫毛は凍る。どこをルートにとっても同じような急斜が東面に展け、どの点から尾根に

接続するか。しかし容易にガスは切れず風雪はラッセルを消して行った。ザックをデポり空身で下って尾根通しの確認に努める。一つの尾根状をそろりそろりと降る。或る距離を降りないと尾根と斜面の区別もつかないのだ。これは北に流されたと意識してザックデポに戻る。一沢おいて南の尾根に乗り換えてさぐる。これぞと狙いをつけて降ってみれば小さな導標にはなこすりとあって夏径上に乗ったことが判った。

逡巡すること二時間半、直距離は僅か一〇〇〇メートルに過ぎぬのに深雪を踏散らして歩いた距離はその何倍あろうか。持合せの智恵の限りを尽し視覚の限り体力の限りを尽して蜘蛛の糸のような一本の尾根をさぐりつつ雪を漕ぎ廻っていたのである。それでも少しは予猶があったとみえてメモには二、三下手な歌が書きつけてあった。

「痴呆のごとラッセルしつつ笑むわれは樹々のゆっくり揺れて過ぎ行く」「黒い木と白木狂える名号にわれはさまよう雪に埋もりつ」等であった。それでいて今夜は仙台では例会があるのでそいつに問に合うように頑張らなくちゃ、突然ドアを開けて皆を驚ろかしてやろうなどと本気になっていたのは少し異状でもあった。

しかし、この尾根は吹溜るとみえて腰きりのラッセルであり裸地で大した樹木もなく新雪は鯨薙刀で剪ったようにバックリバックリと亀裂して総毛立つ思いである。雪崩の前兆なのだ。高差二〇〇メートルの降りは続いた。小規模の雪崩を起しつつ高速度撮影のように緩慢な動作で静かに運を天に任せて降下して行くばかりである。傾斜は緩やかになり一応雪崩の危戦は突破した。それと同時にやや視界も広がって来る。濁川のガスが一時晴れて凄絶な三途の川の断崖が現れた。間もなく一〇時にならんとする時三九番の古いツアーナンバーを発見した。やや晴れ間の好機を逸せず一時間ラッセルを続けて後、青根の山のトンガリを眼下に一一六二メートル無名峯に憩う。広闊な頂上はダケカンバと松が散在するばかりで白一色に盛上り、下界の一部も見渡せるし濁川を隔てて澄川後見ゲレンデの拡声器の音楽がと切れとぎれて伝って来る。

心和やかに昼食とし大いに活力を養う。一一：四〇頂上を辞してこれより針路を北に改めれば巨大な雪庇が出現する。小ピークを乗越え尾根はずしをやり九六二Ｐで一本立てる。一三：〇〇　九六二Ｐを出て更に小峯を並べた六方山への尾根を辿る。植生は次第に樵の原始林となって来て天気の小康状態は終り再び雪雲が重く垂込めてきた。四五分間のラッセルで六方山（一〇二四メートル）頂上の測量標識櫓に出る。この付近は尾根がクランク状に曲るので大へん神経を使うところである。二万五千図でも一旦「遠刈田」から「今宿」に根が入り込み更に逆戻りして「遠刈田」に入り改めて「今宿」に入り直している。八〇一尾根付近にザックをデポり偵察に出かける。再び雪となりザックの上に積もりはじめる。測量櫓がまた現れる。

一四：二〇になった。そろそろ宿の心配もしなくちゃならない。まだまだ先は長いことだし早いとこ宿にありつきたい。この付近ぐいぐい引込まれそうな尾根がいくつかあり、とんだ陥穿でもある。八〇一地点をどうにか越えて急斜の下りにかかるあたりで雪洞適地をみつけて一五：〇五作業にとりかかる。昨夜とは違って充分厳選された雪庇である。殆んど完璧な雪洞が進行して行った。今回の最後の宿となるに違いないのでなお更に心をこめて雪洞の壁を細工する。お灯明を上げてお神酒を供える。明日は八ツの頂上を乗り越えて、里に降りるのだが標高八〇〇メートルを越える山はもうない。多少の荒天でも極端にガスによる妨害はないと思われる。地図上測距は八キロメートルであるがその間八峯一上一下のアルバイトと薮の抵抗が予想され決して甘くは見られない。低山には低山の難しさがあるものだ。積りそうな重い雪に山は閉ざされ暮れていった。

三月二七日

夜来の雪も止んで天気は晴となった。六：四五　雪洞Ｎｏ・３を出発する。西の風だ

蔵王、後烏帽子岳

けは強く寒気に身も締る。平野部が遥かに見渡せて太平洋沿岸まで見える。しかも海岸まで真白い雪で浄められているのだった。

吹雪く間に海瞥見す渚まで　雪積みけらし蔵王降る日

雪洞からは一直線に六六四メートルの鞍部へ雪を蹴立てて駆けおりる。天気であることが嬉しくて兎と一緒に駆け跳ねて行く。伐採地帯とて樹木少くススキと笹が若干見られる。三角錐山（七九六メートル）へは一三〇メートル程の急登である。登りつめるとそこにも測量櫓があり休むには早過ぎるけれども久々の晴天に気をよくして風景を楽しもうと腰を据えた。西正面に毅然と聳える雁戸の山容は正に圧巻である。驚くべきことに本年の豪雪のため、頂上付近の巨大な雪庇は余りにも発達し山体の面貌を変えてしまった程なのであった。その背後に三方荒神、地蔵、熊野、刈田、屏風、烏帽子と巨人が並び更に神室の南面、南壁が右手に迫っており、その魅力に魂を奪われ立ちつくす。ワッパで踏固めて雪洞扉を敷いてスケッチブックを開く。メモをみると七：三五～八：五〇まで一時間一五分、この頂上に滞在していたことになる。

三角錐山から北東に駆けおりること一〇分にして枯ススキが美しいコルに出て再び一〇〇メートルの登りで無名峯に出る。俯瞰すれば西側数十メートル下に凹陥地があり付近の皆伐の中にその周囲のみ木が残されている。エクボ岳と愛称を奉る。何となくのどかな小世界である。

一〇：〇二　七七八メートルP・ナナヤ岳に立つ。一本立ててここから真東へ折れて急な降りとなる。先程の晴天も永続きせず山全般に曇って来た。もうこの付近は藪が妨害しはじめる。それにワッパの着雪がひどい。一〇：三六　八〇〇メートル無名峯に到着。ヨロズ岳を奉る。昼食休憩とし三〇分滞在。どうも悪い癖で山に愛称をつけたくなる。そういうことは誰かに言わせれば何らかの方法で名前を捜せるのにその努力もせず自分勝手に銘名し、その上公式の会報にまで持込まれては会の面目にもか

かわる。第一山に対する冒涜ではないか！となりそうであるがどんな小峯でも地図上で無名であることは淋しいことで誰にも判らずにこっそり名を奉る気が起るのであった。それは小峯にもそれぞれ標高点があるしまた、なくとも形態、樹相、岩質、緩急など個性はいくらでも見出せる。山への愛情が時にユーモラスな、時にズバリ的を射た愛称となって飛び出して来る。しかしそれは後めたさをカバーする世迷言に過ぎぬ。

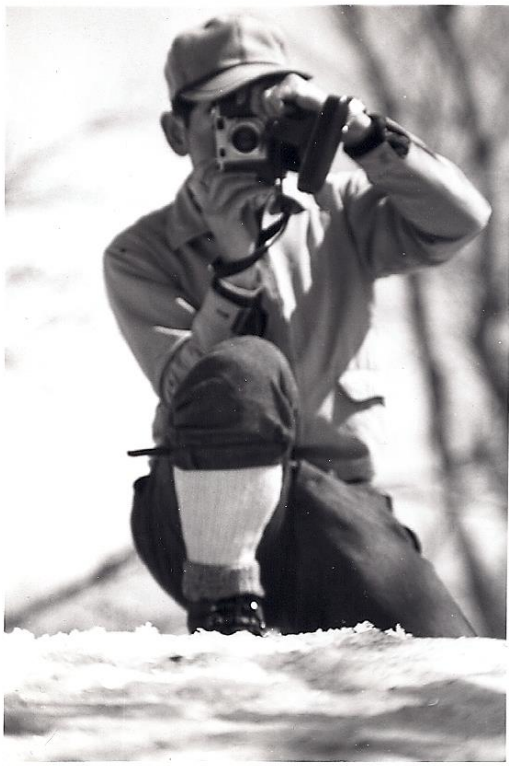
一一：二四　同岳を南に急降する。ワッパの上下に伴い雪の小塊が先を争って転り落ちる。私の速度も早いのでちょうど雪つぶてと同じ降下速度である。じっとワッパの周辺をみながら歩いて行くと何百もの小人達が大行進しているような幻想に陥入る。前後左右その軍隊は私の凱旋を歓迎してくれるのだ。まるで私はガリバー先生になって熱狂的大歓迎を受けているのだ……

真昼の夢はふっと消えて再び登りとなり、七三二Ｐから鋭角に折れて柴山に下って行く。雪の腐れと灌木の籔こぎ、蔦性の妨害でペースはガッタリ落ちる。この付近は尾根上でも鉈目も何も見出せない。次の山は七二〇メートルあり、針路を断つように直角に交って南北に屏風のように立っている。一一：五三　七二〇メートル横根岳に登った。ここにも測量櫓があった。天は曇り小雪が舞い散っていた。しかしこの頂稜からは東面が急に薙ぎ落ちて目指す縦走尾根への進路は断たれていた。しかも低山帯にしては不相応の大きな雪庇が一帯に懸っている。ザックをデポり雪庇の弱点を捜して足場をつくり下ってみる。高差一五〇メートルの下りだが樹木のため、見通しが効かない。偵察してから頂上に戻りザックを背負いなおしてラッセルを辿る。しかし下方では沢状を一ケ所潅木伝いにトラバースして目的の尾根におり立つ。

一三：〇〇立石山（六五六メートル）ここにも櫓があった。この山で今日の七峯目が終るのだ。ふり返れば、風雪の幕がおりてもう何も見えないのだった。母からよく

聞いた言葉に「百里の道を旅する者は九十九里を以って央とす」を思い出した。ここが中央で油断は禁物、風雪は強まりつつあった。鞍部までの高度差二〇〇メートルは難なく降りつつあった。眼前に小雪のベールを被った鹿蝗山が茶臼型にぐんぐん迫って来た。その大きいこと大きいこと。黒く蔽いかぶさるように視野一杯に迫ってくるのだった。その山腹に二条の白い道らしきものが見られ一つは途中で終り、一つは頂上へと導いて行くようであった。鞍部は杉の植林帯となっていた。左手をさぐってから右手に廻り込み薮こぎして白い道を捜し出す。昨秋にでも刈払ったものか切り株や払った枝が山積して急斜と浅雪で仲々楽じゃない。しかし一三:五七やや平状となった鹿蝗山（五三四メートル）頂上に達した。頂上には祭祠でもあるものと期待していたが何も見当らない。丈の低い灌木が疎らに散らばっている物淋しい冬景色である。長い縦走を感謝し掌を合せる対象はこの頂ではなく遥かな蔵王大権現であったのだ。山頂の雪の褥に横たわり顔に積る雪も快しと感じていた。風雪ものかわ、念願が叶った嬉しさにツェルトを被る気もしなかった。

吹雪に追われて幕を閉じるのもまた宜なる哉。十数分の後、最後の頂上からお別れである。高度差三〇〇メートルを天下れば里の人となる。ラッセルを若干戻り切通しを伝って東方に降る。これがまた、可成りの傾斜でありグリセードでもやってるような工合で、降るというよりは墜ちて行くの形容が相応しい。個人の持ち山らしく何の誰がし等、林界標が目につく。大きな動物の足跡が頂上近くまであったが人里も近くなると大きな犬の鳴声がしている。杉の成木帯を抜けると小川が横切り渡れないので遡って行くと板の橋があり、ナメコや椎茸のホダ木が沢山組んである所に出た。民家があり防風林のように道路に向って直角に大樹が並んでいる。その樹の下をゆっくりと道路にと歩く。犢の如き黒犬が遠くから異形の男にさんざん悪態をついていた。グレーダーで除雪された道路は堅く凍てつき、そこでワッパとオーバーシューズを脱い

で肩にかけ野上の往還へと歩き出した。時計は一五時を示していた。小雪はどこまでも追いかけて来た。

（やまびと二〇号掲載）